

---

# ムシウタ 孤高の狙撃手

すけかく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ムシウタ 孤高の狙撃手

### 【Nコード】

N1276L

### 【作者名】

すけかく

### 【あらすじ】

虫、それは少年少女に寄生し夢や希望を喰らう代わり異形の力を与える生物。

この生物に寄生された者を人々は「虫憑き」と呼ばれた。

この物語は『虫憑き』から恐れられた孤高のスナイパー『クーガ』の悲しい物語である。

## プロローグ（前書き）

どもこんにちは。あまり期待しないで読んで下さい

## プロローグ

虫、それは思春期の少年少女に寄生し宿主の夢や希望を喰らう代わりに宿主は異形の力を使役することが出来る。

その生物に憑かれた者を『虫憑き』と呼ばれた。

『虫憑き』に恐れられたスナイパー、『クーガ』

『クーガさん、あなたは子供を・・・撃つことを・・・躊躇わないんですか!』

『子供を撃つことを躊躇わない・・・か。躊躇ったせいで何人しなせなか知らないくせに!』

男は無慈悲で冷淡なスナイパー。だが、彼を恐れ、嫌う者は知らない、彼のあまりにも悲しく残酷な過去そして、彼が背負う十字架を。

「皆死んだ・・・俺が躊躇ったせいで・・・」  
あばかれる男の過去。

「第一空挺団戦術研究班？その部隊がクーガさんがかつていた部隊なんですか？Cさん」

「はい・・・その部隊は虫憑きと交戦した経験のある自衛官で構成された不正規部隊だったそうです・・・特環設立半年後に任務で壊滅・・・数名の隊員しか生存できなかったそうです」

孤高のスナイパーが人を避ける悲し過ぎる理由。

「俺に関わった奴は皆死にました。上官も部下も同期も……俺のせいだ！関わったせいで！」

この物語は悲しい過去をもつ孤高のスナイパーの物語である。

## 設定（前書き）

設定です。なお89式自動小銃改は自衛隊で装備されています

## 設定

### 登場人物

#### 西島健吾

特別環境保全事務局東中央支に出向する陸上自衛官年齢30歳、階級二等陸尉

元陸自第一空挺団所属の狙撃手。

虫憑きにたいして容赦なくまた、任務のたびに虫憑き本人の『射殺許可要請』さえ出すため特環の虫憑きからは『冷酷なる狙撃手』または『殺し屋自衛官』と呼ばれ嫌われている。

#### 五郎丸とうこ

特別環境保全事務局東中央支部の支部代理。

西島の毎度の如くの『射殺許可要請』に頭を痛めている。

また、彼の虫憑きにたいする態度に疑問を持つ

#### 武器設定

#### 89式自動小銃改（西島専用）

西島専用の銃であり、狙撃仕様に改造され、銃弾も虫の固い表皮をも貫く特殊弾を使用。また、隠密作戦を考慮し消音改良が施されている。

本来自衛隊には専用の狙撃銃が配備されているが遠距離狙撃はもちろん至近距離からの狙撃または戦闘班に随行して作戦支援を行うため、狙撃ライフルではなく機動力のある装備として89式自動小銃を虫憑きを狙撃できる銃に改良して装備している

## 冷酷な狙撃（前書き）

ご意見ご感想ありましたらお願いします。

## 冷酷な狙撃

漆黒の夜の闇に包まれた住宅街、死んだように静まりかえっている。

10階建てのマンションの屋上から見下ろす人物がいた。

足元には二脚に固定された自衛隊の89式自動小銃が置かれていた。

「あゝあ突破された！二人逃げたじゃないか、下手くそめ！」

その男は双眼鏡で遙か遠くの公園を眺めながら怒鳴った。

『こちら指揮本部の五郎丸です！大変です！西島さん！突破されました！』

『支部長代理、状況は確認していますから、あと作戦行動中は名前じゃなくてコールサインで呼んで下さい。』

男のインカムから若い女性の声が響く。『目標2は現在こちらに向かってきている、射程範囲に入り次第目標を狙撃する以上、クーガよりコマンドー送れ！』

『う・・・こちらコマンドー了解です。』

『・・・クーガよりコマンドー、今回も虫を潰すだけですか？』

『あの、何が言いたいですかクーガさん』

怪訝な女性の声がかえってきたが男は気にすることなく淡々と話す。

『ここで目標の虫を狙撃すれば、目標は死んだように感情をなくし・・生きた屍といったようなものになります、もちろん呼吸はしてるから生きていることにはなりますが、そこまでして生かしてあげる必要がありますか？今だ欠落者の治療方法が見つからない状況なのに？むしろここで宿主本体を狙撃して楽にさせてやったらどうです？武士の情けではないですか！』

『クーガさん！いえ、西島一等陸尉！それは許可出来ません！』

女性の声は覇気が籠っていた。

『申し訳ありません、少し感情的になりすぎました・・狙撃体勢に入ります』

『西島さん、あなたは・・・子供を・・撃つことを・・躊躇わないですか』

『・・・特環設立まで対応にあたった自衛官は皆こういいますよ、あいつらは子供じゃない仲間殺しの化け物だ、ってね・・・かくいう私もその自衛官の内の一人居ますがね。』

『・・私には・・そうは思えません。あの子供達は国が保護・・』

『狙撃体勢に入る！交信終了！』

女性の言葉は一方向的に遮られた。

男は無線を切ると89式自動小銃につけられた赤外線暗視スコープを覗く。これにより夜間でも狙撃が出来る。男は引き金に指をかけてターゲットが現れるの待つ。

緑色のスコープの世界のなか二人組の少女が走ってきた見た目は普通の少女だがその横には原付き自転車並の大きさの芋虫と蝶がい

た。だが、その生物は虫であって虫ではない。

少女達は遂に射程圏内に入った。

男は少女の内の一人の横をうごめく芋虫に向け銃弾を放った。銃声というよりプラスチックが欠けたような音、そして薬莖がコンクリートを転がる音が屋上にこだました。芋虫は銃弾に軀を貫かれ緑の液体を垂らしながら空間に溶けていくように消え少女が、体をのぞけて倒れ込む。

もう一人の少女は震えながら少に駆け寄る。

「ダメだな、いいこと教えてやるよ、戦場でな、仲間の死に動揺して動けないやつはなあ戦場で死ぬんだよ」

男は引き金をひきなが冷淡に笑うような口調で言い放った。

音が放った銃弾は蝶を貫き、消えた。そしてもう一人の少女も体をのぞけてひざまずいた。

「クーガよりコマンダー目標2を狙撃、直ちに回収班を派遣されたい、送れ」

男は無線で報告し「撤収する」と呟き無線をきった

「……子供を撃つのを躊躇わない……か。躊躇ったせいで何人死なせたか知らないくせに！」

男は静かに呟くと89式銃をケースに入れ屋上を後にした。

## 冷酷な狙撃（後書き）

読んでいたたぎありがとうございます。この物語は西島というオリジナルキャラクターが主人公です。

ムシウタを読んでいて特環設立前は自衛隊が対策にあたったと書いてあったので虫憑きを嫌う自衛官がいてもおかしくないと思いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1276/>

---

ムシウタ 孤高の狙撃手

2010年10月13日13時00分発行